セクシュアルマイノリティとメディア研究
―ドラマにおけるセクシュアルマイノリティ表象の移り変わり―

髙橋　実加子
学籍番号 HS28-0122B

目次

１はじめに
２「性」をめぐる概念
３先行研究に基づく研究内容
４研究結果
５社会背景と、セクシュアルマイノリティ表象の変化
６おわりに

1 はじめに

本論文の目的は、メディアによるセクシュアルマイノリティへの表象の変化がどのような社会背景の下で生じているのかを考察することである。ドラマ等において、おネエと呼ばれる人々が強烈な個性を放つ脇役として活躍するようになり、2019年度の春ドラマでは5作品が男性同士の恋愛模様や同性愛者を主人公としたドラマが展開された。このように、異質なものとしてではなく、ごくありふれた恋愛のひとつの形として描かれるようになった事は明確であり、本論文で、ドラマにおけるセクシュアルマイノリティ表象の変化を考察することで新たな価値観を生み出す可能性を探れるのではないだろうか。

2「性」をめぐる概念

「性」はセックスやジェンダー、セクシュアリティを含めた多くの要素から構築される複雑な概念であるとともに、文化的社会的に作られたものであるゆえに、変容可能性を持つ。本論文ではドラマにおける社会的に共有されるジェンダー意識、ジェンダー規範の変化を明らかにしようとしている。どのような社会背景の下、「文化装置」であるドラマは、セクシャルマイノリティの表象を生産および再生産する過程を繰り返し、またどのような変化をもたらしているのか。これらを測定することが、本論文の終着点である日本におけるセクシュアルマイノリティに寛容な社会の実現可能性への可視化へとつながっていくのではないだろうか。

3 先行研究に基づく研究内容

セクシュアルマイノリティという言葉には、様々なセクシュアリティの人が包含されている。その中で、オネエの表象の変化と男の絆を軸にした歴史の変遷及びドラマにおける表象の変化を取り上げる。オネエと男性同性愛者を別々に論ずる理由は、多様なセクシュアリティがある中で「おネエことば」を話す人達はメディアよって「おネエキャラ」というメディア特有の意味で扱われてきた歴史を踏まえると、男性同性愛者がメディアからうけた影響とは別の意味合いを持つため、分ける事で多角的に変遷を追っていくことができると考えたからである。

4 研究結果

4.1 研究対象作品とカテゴライズ分け

表１　研究対象作品

年	ドラマタイトル	セクシャリティ	ドラマ枠
2019	凪のお暇	おネエ	TBS 金曜
2018	中学聖日記	バイ／レズビアン	TBS 火曜
2017	あなたのことはそれほど	ゲイ	TBS 火曜
2016	逃げるは恥だが役に立つ	ゲイ	TBS 火曜
2015	表参道高校合唱部!	ゲイ	TBS 金曜
2014	夜のせんせい	性同一性障害	TBS 金曜
2013	半沢直樹（2013年版）	異性愛者（おネエことば話者）	日曜劇場
2012	―	―	―
2011	美男ですね※	オカマ（公式サイトより引用）	TBS 金曜
2010	タンブリング	ゲイ	TBS 土曜
2009	ラブ♥シャッフル	ゲイ（バイ）	TBS 金曜
2008	佐々木夫妻の仁義なき戦い※	ゲイ	日曜劇場
2007	肩ごしの恋人	ゲイやおネエ	TBS 木曜
2006	誰よりもママを愛す※	オネエ	日曜劇場
2005	―	―	―
2004	―	―	―
2003	―	―	―
2002	―	―	―
2001	―	―	―
2000	―	―	―
1993	高校教師	レズビアン	
1975	悪魔のようなあいつ	ゲイ	

4.2 検討①談話分析的観点から見るおネエ表象

抜粋したドラマの中からおネエキャラクターがどのように表象されているかを見ている。2006 年のドラマでは世間から化け物扱いされるなどこの時代の「おネエキャラ」に対する世間のまなざしが見られる。2011 年でも「おネエキャラことば」が笑いや恐怖を示すものとして提示されている。2013 年では「ユーモアに富んだ非現実的な世界」を生産する文脈上の手がかりとしてオネエ言葉が利用され、2019 年の「凪のお暇」では、これまでの作品と異なり誰からも差別的な発言を受けている描写が存在しないことが一番注目すべきポイントである。

4.3 検討②「男の絆」という価値観における同性愛表象の変遷

異性愛こそ正しい性という価値観の広がりの中で、「男の絆」を深める際には「恋愛感情ではない」という意思表示が求められる。「同性愛者」であることが「男の絆」のなかに「性」を持ち込む存在として排除されることになるのだ。この価値観が顕著に表れたのは 2010 年「タンブリング」。同性愛者だということを部員に隠していたが、ばれたとたんにメンバーや他校の生徒からの評価ががらりと変わる。「友情」が性的な関係下にあるものとみなされ、差別的な発言がなされる。これは「友情」で結ばれているはずの「男の絆」のなかに「性」を持ち込まれたという裏切り感、拒否感の表れであると仮定できる。この作品から 5 年後「表参道高校合唱部」でも同じような構成で進む回があるが、同性愛者だと部員に知られた後部員全員で「性」を勉強し、どのように受け止めるべきかを学ぶというシーンを作ることで新たな価値観形成へとつながっていた。そしてこの年以降、差別的な発言の描写が一切なくなる。唯一、無意識のうちに相手を傷つけるような発言をした描写が 2016 年の「逃げるは恥だが役に立つ」で登場する。同性愛者が職場にいる状態を違和・異常の対象ではないことを描きつつも、あえて主人公を介して視聴者の多くが抱きかねない無意識の差別を描写させることで同性愛者に偏見を持っていないと認識する多くの人々が LGBT 当事者を傷つけている可能性があることを示唆している。

5 社会背景と、セクシュアルマイノリティ表象の変化

2000 年までの「同性愛者」に対する世間の認識は、医学の影響を受け批判的でありセクシュアルマイノリティの不可視化を進行させた。しかし、1994 年当初「レズビアン・ゲイパレード」と呼ばれた「パレード」も 2019 年には 20 万人の参加者が集まるイベントとなっていた。それは「私たちはここにいる」という当事者からのメッセージであると同時に、社会における顕在化を果たすものであった。こうした変化はドラマにも現れており、同性愛者は当初は批判、差別を受ける対象であったが、2017 年以降の作品では差別的な発言が見られなくなる。そこには SNS の存在も大きく関わっていると考えられるが、セクシュアルマイノリティを社会のごく普通にいる人々として表現することが、視聴者の意識の変化にも影響をもたらしている。

6 おわりに

日本における同性愛差別撤廃の動きの遅れは、さらなる制度的な取り組みと同時に、個人の意識のあり方も大きく関わってくる。同性愛者にとって生きやすい社会とは特定の誰かにとってではなく、誰にとっても生きやすい社会である。小さなアクションが、「文化装置」であるドラマによって切り取られ、表象されることで「感覚・意味・意識」を社会的に生産および再生産を繰り返す。そして、同性愛者にとって生きやすい社会の実現へとつながっていくだろう。メディアによるセクシュアルマイノリティ表象の変化がどのような社会背景の下で表れているのかを考察し、これまで多様に変化してきたドラマにおけるセクシュアルマイノリティ表象がこれからも変化していくことは明らかだ。その点において、日本におけるセクシュアルマイノリティに寛容な社会の実現可能性を可視化できたといえるのではないだろうか。